『和』川柳社 7月会報 No.694

定例会 二〇二〇年七月二三日（木）

暑中お見舞い申し上げます

横浜市から届いた三好日出一さんのおたよりに狂歌が紹介されていました。

大トラになれば羊も危険なり
群の中にはコロナが潜む

群 ↓ 君

〝君〟という字は〝コロナ〟で出来ているんですね。座布団三枚！　三好さんは、「和」の創立者・故 岡田一杜さんの友人。「和」とは四十年以上の交流で、以前は「和」に投句もされていましたが、今では読売新聞の投句が中心だそうです。お元気で！

《速報》

東京（中日）新聞
『平和の俳句』に浜本大蔵さんの句

平和だねぇこの一言（つぶやき）の世がほしい

編集後記に解説しました。

山ぎわに住宅が貼り付き、遊水池も宅地化。雨水の行き場がない。河川災害は治水策の失敗でもある。「GoTo」で感染が全国に拡散。医療現場の献身は無視された。政治禍だ。（周）

皆んなで選んだ 今月の秀句

政権が治水さぼって人流す　中野 林

看護師の献身ゼロにする解除　遠田 亀公子

◆目次

川柳互選・課題吟「水」……2
自由吟……3
自選句・おたより……5
ほのぼの川柳……8
立入川柳・穴あき川柳……8
戦争前夜抄／関東大震災、甘粕事件、伊藤野依（のえ）⑲……8
シベリア抑留の記録㉑……12
編集後記を兼ねて……16

例会案内

8月例会　8月27日（木）
投稿締切　26日（水）
課題「群」　3句以内
自由吟　5句以内
自選句、自解筆もよろしく。

7月の川柳互選

◆課題吟「水」

一人3句以内吐（13人の互選）

これもダメ私とあなたは水と油　北の山
ずぶぬれの俺にハンカチ女の子　一角
チャンバラか水鉄砲か男の子　一角
仏壇にゴハン忘れても 水だけは　宏
過去最高 真水は言わぬ 誇張策　高坊
水鉄砲子ども食堂ここでなら　一角
天災と人災間で骨を折り　大峰
大水害学べよ行政河辺の宅地　未知子
汚染水今か今かと海眺め　林
災害指定水害プラスコロナ害　未知子
一滴を粗末にしたのか暴れ出し　立東爺
自民亭 死刑・水害 なんのその　高坊
水害もオンラインで体験す　白眞弓
源流の一滴呱呱の声上げる　ダン吉

環境の　原点質す　水俣病　広助
あの時の水は両手で受けていた　ダン吉
水と油それでも友は有り難い　ダン吉
併合を水に流せと云う狡さ　大峰
列島は泥水とコロナで見え隠れ　大峰
苦しみは　コロナ渦中の　豪雨災　広助
雨水が命の水の極貧地　亀公子
水飲んで空腹こらえるステイホーム　林
命育み時に暴れて家流す　立東爺
命の水命飲み込み猛りゆく　白眞弓
コロナという洪水見えぬ首脳陣　徹乗
中村氏「水」掘り医療　平和賞を！　宏
水漬く屍になれと言われた戦争下　徹乗
浄水器ひねれば水の出る驕り　亀公子
水際のブロックむなし新コロナ　徹乗
安心出来る堤防が無い天井川　大峰
球磨川が奪いし命不知火に　白眞弓

10　十年に一度の水害毎年きたる　高坊
11　軍備より　治水を先に　やりなさい　広助
12　洪水とコロナと安倍の三重禍　立東爺
12　洪水の日本の裏で死の砂漠　亀公子
13　アベ政治水に流せぬ赤木氏の死　宏
14　**政権が治水さぼって人流す**　林

◆自由吟（互選）

一人5句以内吐（14人の互選）

2　アシュアを中国にでも売りに行け　大峰
2　国民を信じて国会閉会中　未知子
1　我々はみんな同じでご安心　未知子
1　このままじゃ野党共闘なし得ない　高坊
1　被災地に何のためだか大臣が　一角
2　アシュアキャンセル先物買いで穴に落ち　大峰
2　半年も検査進まぬ謎コロナ　立東爺
2　顔見せずあなたも罹った安倍総理　北の山

2　渡された薬ノルマに追われてる　ダン吉
2　GO-TOは地獄に向かう心から　一角
2　五輪こそワクチン未完で「金」目当て　宏
3　憲法は親の遺産だ大事にしよう　北の山
3　クラスター命懸けだが遅すぎる　一角
3　原爆忌ロザリオいだき鐘の音よ　宏
3　日米安保のお粗末基地だけを作らせる　大峰
3　第二波は米軍基地が大元で　一角
4　Go toで向かうはこの世の地獄かな　高坊
4　辺野古にて数多（あまた）の悲劇醸す国　林
4　被災地は除外にあらず蚊帳の外　亀公子
4　責任者だんだん声が小さくなる　ダン吉
4　くたびれた暖簾あの日のままでいる　ダン吉
5　派遣切り　自己責任の　風が吹き　広助
5　大半がGo Toなどに縁がない　ダン吉
5　GO-TOを税のゴウトウ後手後手ね　宏
5　政権の　GO-TO-キャンペーン　迷走す　広助

6 選挙には　酔わせる金で　票集め　広助
6 耳タコになった「検査が進まない」　立東爺
6 桔梗咲くあのふる里はいま水禍　ダン吉
6 何一つ 実行ゼロの 知事再選　高坊
6 年金で　安息がない　貧富の差　広助
6 公僕が主人を殺して居直るか　北の山
6 帰省をも規制している老いた母　白眞弓
6 コロナ禍で 天災でもあり 人災だ　宏
7 ばら撒きに色めく御用提灯族の群れ　亀公子
7 専門家会議を閉鎖口封じ　徹乗
8 国会を閉じて暴君逃げ回る　林
8 医療現場の声が届かぬ現政権　徹乗
8 国中に飛沫飛び散る「ＧＯＴＯ」策　林
8 散りぎわのモリカケザクラひと休み　立東爺
8 ブースターが先に落ちて来る兵器　大峰
9 コロナ禍に旅行を煽るは火に油　北の山
9 医療破壊ゴミ袋で作る防護服　大峰

9 核要らぬ「平和」希求と兜太の字　宏
9 ＧＯＴＯで津々浦々に蒔く火種　亀公子
10 思いやり予算で子らの首を絞め　林
11 暴走す震禍に水禍に政治の禍　立東爺
10 コロナより五輪心配する首相　徹乗
10 コロナ禍に悪夢むさぼる改憲魔　林
10 ＧＯ-ＴＯ で隔離ベッドにご案内　立東爺
12 オスプレイコロナまみれで飛来する　亀公子
12 いつもより三密している家庭内　白眞弓
16 **看護師の献身ゼロにする解除**　亀公子

◆編集ミスで消えた句（編集後記に顛末を）

医療破綻するぞ GoTo キャンペーン　徹乗
ボルソナロのやりたいことを安倍もやる　徹乗
Go To が Go back To のトラブルに　白眞弓
アベがいてゆりが花咲く都知事選　白眞弓
おいコロナ太陽横で焼かれ死ね　白眞弓

自選句

◆自選句　中野 林

税の流用で票の爆買い
電通が手刀を切るコロナ益
埋め立ての我慢は四日ほぼ病気
幕引くも疑惑大きく隠せない
危うきに近寄りがたく国会止め
国会を止めて疑惑の幕を引く
コロナ禍を福となしてる中抜き策
急を告げ途上国へ落ちてゆく
冷たいね国が持たない給食費
お金には色はつかぬが手垢染み
日本の平和を守るにアベが癌

◆自選句　前田大峰

ボールペンより先に取り替える非正規
検察庁は拘置所へ持って行き
汚染水世論に薄めて海へ捨て

おたより

◆遠田亀公子さんより

あらゆる会議や催しが中止か延期という四カ月。やっとそれが解除されたものの、調子が出ません。時間があればいい句も出来るはずでしたが、いかんせん頭の方はサッパリ言うことをききません。年ですかねえ～。

◆岩佐ダン吉さん（大阪）より

《前月のＰ７、私の２行目は誌上句会です。》

通常の句会がほぼ「誌上句会」に替わりましたが、この作業は意外に大変。選者とのやりとり、嵩む通信費、切手の処理……、そんな中でやってくる各地の市民川柳大会の秋、多くが市からも文

化行事で会場は確保できるものの〝三密〟のクリアーは絶望的です。コロナ禍は言論、表現の自由の敵でもありますね。

ほのぼの川柳

カメ見つけねばりねばってゲットした　神田鯛
ツバメのひな巣から落ちたが元気だよ　神田鯛
セミ採りに行くが採るのはお父さん　神田鯛
お白湯には不思議な力 母の味　寿賀子
自粛中テレビ観ながら足体操　東爺
自粛中ベッドで自転車曲芸師　東爺

立入川柳（言葉を織り込む）

高らかに鐘をつきつつ祈願する
（鳥名＝タカ、キツツキ）

穴あき川柳（□に言葉を入れる）

□の手を如意棒として仁王立ち
答え＝孫　作・辻寿賀子（東京）

『戦争前夜抄』⑲

関東大震災／朝鮮人虐殺、甘粕事件と伊藤野依のこと

周　立東爺

9月1日は「防災の日」。その由来となったのが、97年前（1923）の関東大震災である。

この関東大震災をきっかけに起きた大事件が朝鮮人虐殺と大逆事件、それに甘粕事件である。大逆事件では金子文子が犠牲になったが、伊藤野依は、大逆事件とはまったく無関係で、甘粕正彦という憲兵大尉によって夫・大杉栄と甥の宗一と共に惨殺された。甘粕事件とよばれている。

この事件、辞書に次のようにある。

【甘粕事件】1923年（大正12）関東大震災の直後、憲兵大尉甘粕正彦（1891～1945）らが大杉栄と

その妻伊藤野枝らを虐殺した事件。亀戸事件・朝鮮人虐殺事件とともに、戒厳令下の不法弾圧事件。（三省堂 大辞林 第三版）

甘粕事件を記す前に、伊藤野依の略歴紹介

伊藤 野依／野枝（いとう のえ、1895年1月21日 - 1923年9月16日）は、日本の婦人解放運動家、無政府主義者、作家、翻訳家、編集者。戸籍名では伊藤ノエ。世評にわがまま、奔放と言われた反面、現代的自我の精神を50年以上先取りして、人工妊娠中絶（堕胎）、売買春（廃娼）、貞操など、今日でも問題となっている課題を題材とし、多くの評論、小説や翻訳を発表し、平塚らいてふ主宰の『青鞜』に参加し平塚から『青鞜』を引き継ぐ。

甘粕事件で憲兵に殺害された。野枝の遺体は、畳表で巻かれ、古井戸に投げ捨てられた。享年28。

53年後に発見された死因鑑定書によれば、野枝、大杉、共に肋骨が何本も折れており、胸部の損傷から激しい暴行を加えられていたことが発覚。軍法会議法廷で甘粕正彦ら被告人は、被害者が「苦しまずに死んだ」と陳述していた。その後の研究によれば、虐殺の命令を出したのは甘粕ではなく、憲兵隊上層部（憲兵司令官・小泉六一）ないし陸軍上層部（戒厳司令官・福田雅太郎大将）であったと推認された。甘粕事件の発覚は、殺された大杉の甥・橘宗一が米国籍を持っていたため、米国大使館の抗議を受けて狼狽した政府（第2次山本内閣）の閣議（19日）で大問題になったからであった（Wikipediaなど）。

甘粕事件で何が起きたか？

先月のこのコーナーで紹介した金子文子の最期の様子を描いた瀬戸内晴美（寂聴）著『余白の春』には、その様子を詳細に描写している。裁判記録や関係者への取材をもとにしたドキュメンタリーである。以下、紹介します。まずは亀戸署での朝鮮人虐殺の様子から……。（文庫12頁より）

・・・

この時、保護検束の名目の許に警察に連行されたものの中に朴烈と金子文子の夫妻もいた。ふたりが代々木富ヶ谷一四七四の不逞社から検束されたのは、九月三日であった。

そしてこの三日の夜、亀戸署では、地獄のような朝鮮人の大量殺人が行われていた。その中には南葛労働組合の幹部六人、河合義虎はじめ北島義蔵、近藤弘蔵、山岸実司、。鈴木直一全員も逮捕されていて、虐殺されている。

四日の朝、亀戸の道端で、三、四人の巡査が荷車に石油と薪を積んでひいて行くのに出逢った八島京一は顔見知りの巡査と対話している。「石油と薪を積んで何処へ行くのです」。「殺した人間を焼きに行くのだよ」。「殺した人間……」。「昨夜は人殺しで徹夜までさせられちゃった。三百二十人も殺した。外国人が亀戸管内に視察に来るので、今日急いで焼いてしまうんだ」。「皆鮮人ですか」。「いや、中には七、八人社会主義者もはいっているよ」。「主義者も……」。「つくづく巡査の商売が厭になった」。

この時、九死に一生を得て生き残り、今もまだ健在な全虎岩は、日本名を立花と名乗り孫たちに囲まれた平和な余生を送っている。

晩秋のある日、この貴重な証言者の肉声で当時の模様を確かめたく、大和郡山市の郊外に住まわれる氏を訪ねていった。

（略：南葛労働者とのいきさつを語る）

「二日の夜になると、もう町は自警団が出て異様な緊張で見張られてきた。炭坑の朝鮮人労働者がダイナマイトを盗み集団で東京を襲撃してくるから、自衛するのだとかいって、朝鮮人は片っ端から殺されそうな不穏な空気になっているんだな。そんな馬

鹿なことがと思っていたけれど、夜になったら朝鮮人が多勢、追われて逃げていくというので、私は近所にあった朝鮮人の飯場まで様子を見にいった。ここは二十人くらいの朝鮮人が鉄道工事に従っていた所ですよ。ここへ、右翼の黒竜会の連中が日本刀などひっさげて襲撃して、片っ端から斬り殺している。朝鮮人は近くの蓮沼に逃げ込んでいくのを、沼の中まで追いかけて、斬り殺すので、沼は血の池になり、地獄図そっくりなので怖ろしくなってあわてて逃げ帰ってしまった。工場の仲間にあんたは朝鮮人とわかっているから物騒だからかくれていてくれと、社宅の押入にいれられて、外に見張までしてくれたけれど、朝鮮人狩りは衰えるどころか、ますます狂的になっていく。私が社宅にいることがわかったら、みんなに迷惑をかけることになるし、三日の昼になると、警察が保護収容しているというので、そっちが安全だから行こうということになった。ひとりで歩くと必ず殺されるといって、工場の友達が竹槍を持って十数人で私を囲んでくれて、警察まで送りとどけてくれた。道には殺気走った自警団や兵隊まで出動していて、銃剣も竹槍も真赤に血塗られているし、道路で、朝鮮人が突き殺されるのを何度も目撃するし、あの時はほんとに生きた心地もなかった。私も何度か危ない目にあったが、仲間が守ってくれ、とにかくようやっと亀戸署までたどりついたんです。

収容所にしていた署の道場の中は朝鮮人同胞で満員になっていて、私は隣の二階建の大講堂へ入れられた。ここも続々つめかける仲間でたちまち、足を伸ばすことも出来ないくらいになってしまう。千人は超えていたでしょうなあ。どの入口にも巡査が立って警戒している。中国人も五十人ほどいて、これは道場と講堂の通路に座らされていた。

三日の日も暮れて、夜明け方、銃声が二発聞こえてきて不気味だった。朝、便所へ行ったら、窓の所で、巡査がふたり立話をしているんだ。その中に

川合ということばが在ったので、ああ、あの銃声は川合さんたちががやられたのかもしれないと思ってぞっとした。便所のまわりには死体が三、四十積んであるんですよ。ぎょっとしたね。隣の道場でも血を浴びた朝鮮人が三百人くらい縛られていた。その日はずっと虐殺がつづいて、同胞が庭につれだされては目かくしされ裸にされ、号令のもとに銃剣で一突きにする。ちょうど芋を刺すように刺し殺された死体を別の兵隊が俵を積むように無造作に積みかさねていくんです。

私が二階の自分の場所に戻って見ていると、死体が階下に積みあげられ、重なって、二階の踊り場までぎっしりつまってしまった。しかし人間は、なかなか一突き二突きで死ねないらしいね。それらの死体の目だけが、ぱちぱちあちこちでまたたているのが不気味で、目もあてられない。生きている我々の方も神経がおかしくなって、死人よりみんな青ざめ、目ばかりぎょろぎょろさせて、口ひとつきく者はいなくなった。

危なかったのは三日の夕方でね、亀戸署の朝鮮人係りの特高の北島という男が二階へ上がってきて、きょろきょろ誰かを探しているんだ。私は顔見知りなのでつい北島さんと声をかけたけれど、どういうわけか北島は私に気がつかないで、そのまま降りていってしまったんですよ。あとで、南葛労働組合の者がみんな殺されたことを聞いて、ほんとうにぞうっとした。北島はもちろんあの時私を探しに来たんでしょう。実際、当時の新聞には、私も一緒に殺されたと出ていたんですからね。その夜も夜通し虐殺が行われて、一晩に三百何十人も殺したなどという話し声がしているんだ。

警察は川合をはじめ南葛労働組合の連中たちが革命歌を歌い大衆を煽動するから殺ったとあとでいってますがそんなこと嘘ですよ。はじめっから地震のどさくさに殺すつもりで連行してるんだ。大杉夫妻だって、朴烈、文子だってそうじゃないですか、ねえ。

五日の夜中になってようやく虐殺が止み、今度は消防署の荷車二台がいったりきたりして、死体をせっせと運び出している。何でも国際赤十字の調査団がやってくるというので大あわてなんだな。死体は荒川放水路の四ッ木橋のところに運ばれ、薪とガソリンで、焼き払われた。後で私はそこへ遺族と見にいったけれど、そこは機関銃を据えつけて、数百人の朝鮮人を銃殺した場所でもあったんだよ。」

（略：たんたんと描写が続く）

「石炭殻で埋立てた四、五百坪の空地だった。東側はふかい水たまりになっていた。その空地に東から西へほとんど裸体にひとしい死骸が頭を北にしてならべてあった。数は二百五十ときいた。ひとつひとつ見てあるくと、喉を切られて、気管と食道と二つの頸動脈がしろじろと見えているのがあった。うしろから首筋をきられて真白な肉がいくすじも、ざくろのようにいみわれているのがあった。首の落ちているのは一体だけだったが、無理にねじ切ったとみえて、肉と皮と筋がほつれていた。目をあいているのが多かったが、円っこい愚鈍そうな顔には、苦悶のあとは少しも見えなかった。みんな陰毛がうすく『こいつらは朝鮮じゃなくて、支那だよ』と、誰かがいっていた。

ただひとつあわれだったのはまだ若いらしい女が――女の死体はそれだけだったが、――腹をさかれ、六、七ヶ月になるかと思われる胎児がはらわたのなかにころがっていた。」

（注：以下数行、むごくて文字に出来ず。）

――筆者　文庫20頁。

「いかに恐怖心に逆上したとはいえ、そんなことまでしなくてもよかろうにと、ぼくはいいようのない怒りにかられた。日本人であることをあのときほど恥辱にかんじたことはない」

大杉栄と伊藤野依の様子

そんな騒然とした世間の狂気沙汰をどう観じてい

たのか、この頃大杉栄は、金紋入蝋塗りの豪華な乳母車に魔子やルイズを乗せ、遠州橋の大柄な湯あがりの片端折りで、一日に何回も近所を散歩していたし、夜になると、世間のつきあいだからといって夜警にも加わったりしていた。

大杉も野依も生涯の中ではむしろ、最もおだやかに暮している頃で、帰朝後は警察を刺激するような運動らしいものも何ひとつしていないので、自分たちが検束されるなどとは思っていなかったようだ。

九月十六日の朝、九時頃、大杉と野依は揃って洋服姿でつれ立って外出するのが近所の人の目をひいた。大杉は鶴見に住んでいる弟の勇一家を見舞いにいったのだった。そこにはたまたま、アメリカへ嫁いでいた大杉の妹の橘あやめが、一人息子の宗一をつれて帰国して身を寄せていた。

（続く）

シベリア抑留の記録 ㉑

「在ソ三年　生と死のドラマ」

故・秋山茂氏の遺稿より

ペンキのはげた痛ましい信洋丸がナホトカに待っていた。公海に出た帰還船の中は長い間、屈従を強いられた鬱憤の爆発である。「こいつら日本に還えすな」「水葬にしてしまえ」。甲板は制裁の修羅場と化す。人間とはなんと愚かしいものだろう。大方の者が甲板に出たため広い船倉は、寒々していた。わが国は無謀な大戦に敗れ、七十万人の日本人がソ連に抑留され、五万有余の生命が失われた。

10　赤い覇道

今時の第二次世界大戦に自力を過信した日本軍閥が無謀に引き起こした戦争責任が追及されるのは当然だとしても、戦争の過程や戦後処理に於いて覇道

が許容されてよいものだろうか、という疑問が起こる。殊にソ連邦の場合一九四五年（昭和二十年）八月九日、国際信義に反して、突如日ソ中立条約を一方的に破棄し、対日宣戦を布告して旧満州国並びに北朝鮮樺太、千島列島に進攻し、約七十万人と云われる民間人を含む日本人を捕虜として長期に亘りシベリヤをはじめソ連領内の各地に抑留酷使し、その間に五万数千人の生命を失わしめたばかりか占領物資と称して公私資産の見境いなく占領地域内のすべての物資は勿論、施設まで一物を残さず自国内に強奪搬入しながら、これを正統化するような言辞が通用して世界の平和が維持できるとは思われない。

殊にわが国の場合、所謂北方四島は講和条約に於いても放棄しておらないにもかかわらずソ連は武力占領後自国領土として使用し、わが方の返還要求に対して「解決済み」と放言する理不尽さの裏に対米戦略の拠点として四島を重視している意図は推察されるが、日本国民として納得出来るものではないし、これこそ前世紀的な「弱肉強食」の「強い者勝ち」という考への現れであり、戦後から昨今にかけ超大国という言葉が米ソ両国の固有名詞のようになっているけれ共、その意味するものが核戦力さと保有量にあるとしたら人類にとって最大の不幸である。

然し、このような戦力の勝れた国が必あｒず世界を制覇するという考へ方は近い将来必ずや崩れ去る時が来ると明言してはばからない。

もともと「なんでも世界一」という思想は一七八三年南北戦争の末、イギリスから独立したアメリカの地理的条件と植民地精神の逞しさの中から生まれたもので、夫れがやがてアメリカイズムとして固定し、全地球上に星条旗をなびかせたのであって、一方ソ連も亦レーニンの共産革命が成功し帝政

ロシヤを倒して以来、今日のブレジネフまで共産党支配によるソ連邦が生まれたのも、広大な国土と豊富な資源に一億数千万人の国民とにより成し得たもので、更らに第一次及び第二次世界戦争の結果、ソ連は戦争成金のような超大国となり米国に対立し得る唯一の社会主義国として今日に及んでいるのであって一九四五年八月以後こうした東西両陣営相剋の中にあって、不幸ソ連の捕虜として日本人の歩いた道、夫れは赤い覇道に外ならない。

11　いま振り返って思う

舞鶴に上陸したわれわれは、元の海兵団の兵舎に収容されて、今度は米軍の指示で行動せねばならなかったが、此処でも依然激しい右と左の対決が続いていた。三日後、東北、関東、中部、北陸、九州、四国、近畿と各出身地別に分かれて帰還することになったが、先に争いの渦中に在った数名の人達が「代々木に行こう」を合言葉に代々木の日本共産党本部に直行した姿は特に印象的であった。

あれから三十余年。

日露戦争後のロシヤ帝国が対日復讐を狙って旧満州に於ける日本の権益をウラジオストック、ブラゴエチェンスク、蒙古の三方面から包囲すべく戦備を固めたのは一九〇九年（明治四十二年）から一九一二年（大正元年）にかけてであって、これは歴史が明示しているけれ共、一九八〇年代の今日、復讐や仇討ち的な所業があってはならない、即ち国連を中心とした「世界は一つ」という観念の普遍化こそ人類共通の願いであらねばならないことを痛感する。今や世界の人口は間もなく四〇億になろうとしている。限りある地上に限りない人口の増加を放置すれば殺伐の繰り返しだろうが、人智の進んだ現代社会にこのような惨事があろう筈はなく、必然的に求められるのが「平和と繁栄の平等なる享受」で、

その為の手段としては各国の統治責任者が「自国中心主義」に固執せず、「世界は一つ」という観点から「国連中心主義」に転換することである。

現実は各国は地球上の各地に分散独立しているから、気候風土に差のあることは否めないとしても、国土の面積に大きな格差のあること自体、まことに不合理であり、矛盾の甚だしいといわざるを得ない。何故なれば歴史的に多少の相違はあるが人類派生の過程からすれば現在独立国として現存している国々の多くは「最初に発見した」とか、「戦争により独立を勝ち取った」とかいうように夫々の紆余曲折はあるが、根拠のない方法で国土というものを獲得しているのである。従って米ソ中国などのように広大な国土と資源に恵まれた国がある反面、日本や英国のように資源に乏しい上、狭小な国土に悩む国々もあり、不平等極まりない。殊に日本の場合、狭い国土に一億の人々がひしめき、然も資源は皆無に近い。だとしたら日本の活路は何処に求めるか、究極的に不本意乍ら、工業生産力の向上に依って外資を獲得し、国富とする以外に道はない。然しこれは危険な一時的な方策であり、国の基本は飽くまで食糧自給という農業中心の姿が望ましい。

この考へ方からすれば日本がソ連に返還を求めている北方四島も大国ソ連邦にしてみれば取るに足らぬ小島であってもわが国にすれば何物にも代え難い貴重な四島で、両国の価値観に大きな差がある。然し現代のようにもてる国、即ち先進諸国が依然として「自国中心主義」の路線を歩む限り戦禍を払うことは出来ず、悲嘆をかこつ人々は絶えないだろう。

一九七九年六月五日

以上で秋山 茂氏の手記は終わっています。抑留記を読まれた感想などお寄せ下さい。

次号、長女・坂本冨沙子さんの感想を掲載します。

（周 立東爺）

編集後記を兼ねて

▼速報！東京新聞（中日新聞）『平和の俳句』、全国8534句の応募句から黒田杏子（ももこ）さん選考の15句に浜本大蔵さん（伊勢原市・金沢市金石出身）の句が入りました！おめでとうございます。▼4頁に紹介した「編集ミスで消えた句」のこと。今回、寺内徹乗さんの2句、白眞弓さんの3句が、選考資料に載りませんでした。資料を作るとき総数を確認せず、忙しさに任せてミスになりました。お二人には迷惑をおかけしました。深謝。▼秋山茂さんのソ連抑留記が完結しました。数えて21回。近々中に本にして娘さんの坂本さんに届けたいと思っています。▼コロナが石川県でも発生し始めました。感染ルートをみるとほとんどが東京由来のものでした。▼「鶴彬を顕彰する会」の会報「はばたき25号」が21日発送されます。乱鬼龍さんの「あるくラジオ」の内容を文字にしました。必見です。「はばたき」申し込みも受け付けてます。（編集＝周立東爺）

8月例会ご案内（毎月第4木曜日）

◆例会　8月27日（木）　◆投稿〆切：26日（水）
◆課題「群」3句以内　◆自由吟：5句以内
◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見なども
お願いします。川柳に関する資料などもご紹介下さい。
◆句報を持参下さい。例会で話し合います。
●投稿FAX（076）254-0762　郵送は下段住所へ。
●メールアドレスは下段に。

「和川柳社」会報 会員募集しています！

同　　人：4000円/年
投句/購読：2000円/年
★会報の他に、関連資料などもお送りします。

和川柳社　〒920-0335 金沢市金石東2丁目15-30（渡辺 寛）
電話FAX：076-254-0762　PC-mail：kananabe@popolo.org
携帯：090-9445-1302　携帯mail：kan-wata@i.softbank.jp
振込先：北國銀行中央市場支店　#191 普通640「和川柳社」

発送に協力いただいています。▼《食育のグリーンノート&土の音工房《オカリナ制作》・上村 彰》